

彙 報

第 62 回日本語学会大会

成蹊大学において、昭和45年5月16日公開講演、会員総会、17日研究発表を開催。

1. 公開講演

レニングラードで北方言語の調査研究を行なって 池 上 二 良
言語障害——特にどもり——の実態 佐 藤 則 之

2. 会員総会

昭和44年度会計報告（別項）を承認した。又、国際学会開催の問題に関して議論を行なった。

3. 研究発表

題目および発表者は74頁以降参照。

第 24 回九学会連合大会

昭和45年6月7日慶応義塾大学にて開催。テーマは「都市化」（本会鈴木孝夫氏が司会）、「沖縄」（本会からは上村幸雄氏、外間守善氏が発表、柴田武氏が司会）であった。

昭和 44 年度第 6 回委員会

日 時：昭和45年3月14日

場 所：学士会本館

出席者：（ ）内は委任状受託数

高津春繁（2）、小林英夫、佐藤孝、柴田武（14）、鈴木孝夫、
服部四郎（2）

委員総数 30 名

議決事項：1) 第 62 回大会について

- ① 日程細目を決定した。
- ② 運営委員長を倉石五郎氏にお願いすることにした。

- ③ 公開講演を佐藤則之・池上二良両氏にお願いすることにした。
- 2) 役員制度小委員会の鈴木委員から小委員会の報告があり討議した。
- 3) 九学会連合の今年の大会は6月7日慶応大学にて開催する旨鈴木委員より報告があった。
- 4) 学会事務所借用について大修館書店と覚書を交換する旨報告があった。

昭和 45 年度第 1 回委員会

日 時：昭和45年4月13日

場 所：学士会本郷分館

出席者：()内は委任状受託数

亀井孝, 川本茂雄, 北村甫, 河野六郎(2), 小林英夫, 柴田武(8),
鈴木孝夫, 徳永康元(1), 服部四郎(1), 前田護郎

白紙委任 1 名 委員総数 30 名

- 議決事項：1) 第62回大会の公開講演者と題目, 研究発表者と題目を決定した。
- 2) 第28回国際東洋学会議(明年1月, キャンベラ)の国費派遣候補者として, 泉井久之助氏を推薦した。
- 3) 役員制度について小委員会の提案を原案として承認した。
- 4) 言語研究バックナンバーの取扱いについて決めた。

昭和 45 年度第 2 回委員会

日 時：昭和45年5月16日

場 所：成蹊大学

出席者：()内は委任状受託数

池上二良, 泉井久之助, 川本茂雄, 小林英夫, 高津春繁(1),
河野六郎, 柴田武(6), 関本至, 徳永康元(1), 服部四郎,
前田護郎, 村山七郎

白紙委任 2 名 委員総数 30 名

- 議決事項：1) 大会運営について決めた。

- 2) 会計報告を別記の如く承認した。(106頁参照)
- 3) 秋季大会候補地を二校あげた。
- 4) 役員制度の問題については委員会で継続して討議することとした。
- 5) 国際言語学者会議を日本で開催しうるかどうかを検討する小委員会をもうけることになり、細目は次回委員会で決定することとした。

昭和 45 年度第 3 回委員会

日 時：昭和45年 6 月20日

場 所：学士会本郷分館

出席者：() 内は委任状受託数

泉井久之助, 亀井孝, 川本茂雄, 小林英夫, 河野六郎 (1),
佐藤孝, 柴田武 (12), 徳永康元 (2), 服部四郎

白紙委任 1 名 委員総数 30 名

- 議決事項：1) 秋の大会の開催候補地について、前回委員会であげた二校とも困難である旨の報告があり、新たに候補として三校あげた。(その後、そのうちの九州大学に決定。)
- 2) 九学会連合に関して報告があった。
 - 3) 国際言語学者会議を1977年に日本で開催できるか否かを検討する小委員会(可能性検討委員会)を設置し、次の6氏と委員長をそのメンバーとすることにした。
泉井久之助, 亀井孝, 小林英夫, 江 実, 鈴木孝夫, 服部四郎
 - 4) 役員制度については、第1回委員会で承認した案について全委員の郵送投票で決定することにした。
 - 5) 「言語研究」に対する文部省からの補助金は昨年度と同じく10万円となった旨報告があった。

◇ 落合太郎先生の訃

落合太郎先生がながく学長をつとめられた奈良女子大学の任を退いて、伊豆半島の山よりにつくっておられた山荘にずっと住まわれるようになったのは、1967～68年のころからであった。ご夫人は早く10年余以前になくなられ、以来、先生は令嬢とともに、その手あついお世話をうけながら暮しておられた。ご退任後も非常にご元気で、地方にも旅行をされ、時には令嬢とともに東京に出て、あの風格のある姿をホテルの食堂にあらわされるのに出会って、昔のままの魅力的な口調で語られる快いお話に、耳を傾けたことも度々あった。

ご夫人のなくなられたとき、折あしく私は海外にいて、奈良で行なわれたご葬儀に列席することができなかったが、代って拝礼に行ってくれた妻からの知らせでは、かたく無宗教の主義を通されてのご盛儀であって、そこにはまた別殊の深いおもむきがあったということであった。ここにも内外のよき伝統には常に深い敬意を払われながら、伝統そのものに無選択に盲従することを^{いさぎよ}潔しとされなかった先生平素の、選択的な合理主義が一貫してあらわれていたと思う。

意外にも先生のご病気があつく、遂に熱海の国立病院に入院されたと、^{ひとづて}人伝に聞いて驚いたのは、69年の3月もすでに下旬に近いころであった。時々伺う先生の御消息では、それまで常にご無事ということであったから、私はにわかにとまどうような心地であった。ただちに支度を整えて私はあくる3月19日早朝、京都を出て熱海に赴いた。病院は海岸に面して、先生の病室は春の暖い海を眼下に見る美しく大きい部屋であった。私を迎えて先生はあの威厳のあるお顔にあたたかい笑みを浮かべながら病床から身を起そうとされる。あわてて押しとどめてから、それとなくお見舞のことばを述べて、ゆっくりとよもやまの話をしていると、先生は「近ごろにわかには耳が遠くて」といわれながら、補聴器を調節して、そのころ全国に^{しやうけん}猖獗していた大学紛争について質問され、中正で穏当な意見を差しさみながら聞いておられた。血色もよろしく、声もしっかりしておられて、思いのほかにご容態はよろしいらしく、退院も間近いと伺って私はにわかには心の重さ

が除かれた心地で、令嬢におくられながら病院を出て、すぐに帰洛した。

その後、時にふれ先生のご容態をお伺いしながら、私には長くつとめた京都大学の定年退官に伴う諸行事があり、4月から始まる新しい仕事の施行計画の樹立と、実行の準備に忙しく、それが次第に軌道に乗ってからは、^{つと}夙に仕事のスケジュールに載せていながら完成がおくれていたデュアルテ・ドゥ・サンデ (Eduardus de Sande) の大冊『天正遣欧 (四少年) 使節記』 (De Missione Legatorum Japonensium ad Romanam Curiam Rebusque in Europa.....animadversis Dialogus. In Macensi portu, 1590) の共訳の全改修と内容の考証、ついで校正に没頭して研究室で夏を送り、9月、ようやくその刊行を待ちながら秋風に我をとり戻し、ただちに『論集・言語の世界』の校正にとりかかったとき、この『論集』刊行のお世話を願っている筑摩書店の井上達三さんから9月24日、にわかにか電話があって落合先生ご逝去のことを知らされた。野上素一さんその他からも同じ通知があって、告別式は翌日、先生の山荘において——とのことである。私は翌朝早く京都を立って伊豆高原 (伊豆市八幡平字峠) の先生山荘についた。式は木村健助さんの穏雅な司会のもとに、先生の遺志どおり無宗教式で簡素・典雅に行なわれた。祭壇には略装をされた先生の親しみぶかく印象的な写真の像があって、われわれは心をこめてそれに拝礼をした。われわれは古くから公私にわたって先生のお世話をうけたものたちであったが、他に先生の古い昵懇の方々もおられた。私の『天正遣欧使節記』はそのあと、一週間ばかりで世に出た。しかし一週間のことで、もうそれは先生にご覧いただくことができなくなっていた。校正を了えた『論集』もやはりそうである。——

今年 (1970年) 3月8日、門下の人たちの手によって先生のご遺族を迎え、京都相国寺の専門道場で先生の追悼会^えを兼ねて、ご納骨式が行なわれた。ご納骨のお墓は磨かれた横立方体の黒御影石。正面には「好去好来」の文字のみが一方に寄せて彫りこまれ、側面に先生ご夫妻の名が、やはり一方に寄せて小さく彫られてそれぞれ西暦の没年が添えられている。すべていかにも瀟洒である。先生らしい、と思われる。

先生、生地は東京、1884年の生れ。第一高等学校を経て京都大学法学部卒業。その後フランスに留学をされ帰日後、その造詣によって京都大学文学部にながく

フランス語学・文学を講ぜられ、新村先生退任のあと数年にわたって言語学講座を担当して主としてフランス語学を中心として、独自の味わいの深い言語論を、実証と理論をかねて講義され、学生をはじめ聴講の人々に深い印象を与えられた。前後数十年にわたって公私に薫陶をいただき、今も心からその徳を慕うものの特に多いのは、毅然として彫りの深い先生の人品と人徳のゆえであろう。先生の文集は生島遼一君の手によって近く世に出ることになっている。

(1970年5月17日記、泉井久之助)

◇ 本会評議員・浅井恵倫教授は、昭和44年10月9日、築地ガンセンターにて逝去された。享年73才。

浅井先生は、明治28年3月25日出生。石川県立小松中学校、第四高等学校を経て、大正7年東京帝国大学文科大学言語学科を卒業された。その後、福井県立福井商業学校、小松町立小松商業学校、公立実業学校教諭を経て大正15年大阪外国語学校教授に任ぜられた。昭和8年、オランダ国立ライデン大学文科大学に留学され、昭和11年、「A Study of the Yami Language, An Indonesian Language Spoken on Botel Tobago Island」の学位論文をもってドクトル・インデ・レテルン・エン・ワイスペヘルテ（文学哲学博士）を授与された。帰朝後直ちに台北帝国大学助教授、翌昭和12年には同教授に任ぜられ、言語学の講座を担当された。昭和18年には南方人文研究所員に補され、台湾のみならず南洋の言語・文学・民俗の研究に従事されたが、終戦とともにそのまま中華民国国立台湾大学文政学院に、昭和21年には台湾省編訳館に留用せられた。昭和22年5月に内地帰還されてからは、第九軍東北軍政府 CIE 顧問、東京大学文学部講師、国立国語研究所を経て、昭和25年には金沢大学講師、昭和26年同教授、昭和33年より永眠されるまで南山大学教授として、また本会評議員、日本民族学協会評議員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所評議員として後進の指導、会の運営にあたられた。その間、昭和32年には東南アジア稲作民族文化調査団の一員として、ベトナム・ラオス・カンボジア・タイへ赴れ、またニューギニアでも言語調査をされた。

浅井先生は、アウストロネシア及びその周辺の諸言語、文学・民族の研究に尽

され、特に台湾高砂族諸語の記述的研究に大きな貢献をされた。「Some Observations on the Sedik Language of Formosa」(昭和9年)、上記の「A Study of the Yami Language」(昭和11年)は、セデック語、ヤミ語についての現在に至るまで唯一の研究である。小川尚義教授との共著になる「原語による台湾高砂族伝説集」(昭和10年)は、後に恩賜賞が与えられたが、この研究によって始めて、12に及ぶ高砂族諸語の全貌が明らかにされた。伝説・説話の研究にも寄与したのは勿論である。「Gravius's Formulary of Christianity in the Siraya Language of Formosa」(昭和14年)は、現在死語となった平埔族の言語の研究の基礎となるものである。以上の著作本の外にも数多くの論文を発表されたが、言語についてのみでなく、民族学の分野に於ける研究も多い。「紅頭嶼民俗資料」(昭和4～5年)、「台湾蕃族民俗資料」(昭和6年)などの論文の他に、「台湾蕃曲レコード」(昭和7年)として三枚のレコードを公けにされたが、現在では全く忘れ去られた、あるいは殆ど忘れかけている蕃曲を後世に残された貴重な資料である。文学方面での研究には「爪哇論語」(昭和14年)、「古代爪哇文学」(昭和16年)などがある。先生の著作目録については、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』第10号を参考されたい。

なお、先生の蔵書、ノート、カード類、その他の貴重な資料はすべてアジア・アフリカ言語文化研究所に譲渡され保管されている。(土田 隆)

◇ 本会評議員、東大名誉教授市河三喜博士は、本年3月17日急性肺炎のため逝去された。享年84才(1886-1970)。

先生は日本における英語学の樹立者として知られ、わが国の英語英文学界および英語教育界に大きな足跡を残されたことは、人の知る通りである。先生の略歴と主な業績とをかかげて哀悼の意を表したい。

明治19年(1886)2月18日、市河三兼万庵の次男として東京下谷に生る。祖父は著名の書家市河三亥米庵であり、曾祖父は徳川中期の儒学者市河寛斎である。市河家の菩提寺は日暮里の本行寺、ただし三喜先生は多摩墓地に葬られている。書家の血をひく先生は清庵と号して書をよくされた。

明治31年(1898)、東京府立尋常中学校(のちの府立一中)に入学。昆虫の研

究に熱中し、動物学の原書を読むために英語を学習し、その学力は教師に舌を捲かせたという。第一高等学校第一部（文科）在学中、さらに英語の研究にはげみ、明治39年、東京大学文科大学言語学科に入学、John Lawrence 先生（1850-1916）の愛弟子として、印欧比較言語学的な訓練をうけ、また英語の科学的研究方法を学んだ。卒業論文は“A Monograph on the Historical Development of the Functions of 'For'”（1909）で、細字で書かれた260頁の精緻な研究であった。

大正元年（1912）、それまでに発表された論文をまとめ「英文法研究」を出版。これは日本における本格的な英語学書の最初のものとして高く評価されている。出版直後文部省留学生として渡英、在外研究のかたわら、言語学英語学関係の図書を大量に購入した。

大正5年（1916）、東大助教授に任せられ英語英文学の講座を担当。大正9年34才で教授となる。学位論文“On the Language of Robert Browning's Poetry”により37才で文学博士。この論文は、その年（1923）の関東大震災により、多くの蔵書とともに焼失した。これよりさき大正10年に、岡倉由三郎教授と共同主幹の研究社『英文学叢書』の刊行がはじまった。当時の英語英文学者を総動員して、両主幹の校閲の下に、英文学の代表的作品100冊の注釈が行なわれたことは壮観であった。両主幹もかなりの冊数を引受けられたが、市河先生は主としてShakespeareを担当された。その他東大在職中の主な著述に、

「英語発音辞典」（1923）、「ラテン・ギリシャ語初歩（英学生の為め）」（1930）、
「古代中世英語初歩」（1935）、「英語学・研究と文献」（1936）、「聖書の英語」（1937）、
「研究社英語学辞典」編（1940）

などがある。昭和14年（1939）には最年少者として学士院会員におされ、終戦後昭和21年（1946）に東大を定年退職された。退職後はどこの大学にも出講せず、牛込北山伏町の邸宅を引払い、成城の簡素なお住居で、植物を愛しながら自適の生活を送られた。上の書目に追加すべきものは、

「研究社英文引用句辞典」編（1952）、「研究社英語イディオム辞典」編（1964）、
「世界言語概説」編（1952-55）

などである。そのほか先生の関係された英和辞書は幾冊かある。英語関係以外では、日本学術振興会の日本古典英訳の委員会に関係し、次の出版物の英訳に尽力

された。

The Manyōshū ; On Thousand Poems (1940), *Japanese Noh Plays* (1955),
Haikai and Haiku (1958)

なお先生は随筆をよくされ、いくつかの随筆集がある。「昆虫・言葉・国民性」(1939)、「旅・人・言葉」(1957)が主なものであろう。また先生は英文にもすぐれており、格調の高い文体で幾編かの文章をものされた。それは先生の80才の誕辰を祝して一冊の書物にまとめられた。*Collected Writings of Sanki Ichikawa* (1966)がそれである。

最後に忘れずに誌しておかなければならないのは、先生の英語英文学会や英語教育界に対する行政的な貢献である。先生の尽力によって日本英文学会は昭和4年(1929)に設立され、また日本シェイクスピア協会はその翌年(1930)に創始された。いずれも先生が初代会長として多年にわたって運営された。また英語教育研究所(現在の語学教育研究所)の理事長または所長として、戦争中の困難な時期を切り抜け、逝去されるときも理事長であった。

昭和34年(1959)文化功労者にえらばれ、同39年(1964)には勲二等旭日重光章を授与された。先生の公的生活は順調であったが、家庭的には早くに二令息を失い、また夫人は二度も先立たれ、御不幸が多かった。御遺族は野上三枝子氏のみである。

(中島 文雄)

日本学術会議第9期会員選挙(昭和46年11月)有権者名簿への登録について

日本学術会議選挙管理委員会からの依頼にもとづき、会員諸氏に下記の事項をお知らせします。

1. 登録用カードの提出について

- (1) 前回(第8期昭和43年)の選挙の有権者については、前回提出のカードにより、本年資格審査が行なわれました。

これに関し、日本学術会議中央選挙管理会から登録用カードを提出されるよう通知のあった方以外の方は、すべてひきつづき有権者名簿に登録されますから、あらためて登録用カードを提出する必要はありません。

ただし、前回の登録における所属以外の部または専門で今回の登録を求

めようとする方は、別記様式第2の「所属部または専門変更届」により、登録用カード用紙を請求してください。

- (2) 前回の選挙の有権者以外の方および前回の選挙の有権者で中央選挙管理会からあらためて登録用カードを提出されるよう通知のあった方が、今回の選挙に登録を求める場合は、中央選挙管理会に登録用カード用紙を請求入手のうえ、昭和46年3月31日までに中央選挙管理会に必着するよう登録用カードを提出してください。

なお、4月1日以後に到着した登録用カードは、次回（第10期昭和49年）の会員選挙の登録用カードとして中央選挙管理会で保管します。

2. 登録用カード用紙の請求について

- (1) 登録用カード用紙の請求に関し、大学・研究機関等に対しては「登録用カード用紙請求者名簿」の提出を依頼しました。

中央選挙管理会では、名簿が提出されれば名簿に基づいて当該大学・研究機関あてに、登録用カード用紙を一括して送付します。

したがって、中央選挙管理会から名簿提出を依頼された大学研究機関等に所属する方で、既に個人としてカード用紙を請求した方以外の方は、なるべく所属の大学・研究機関等から提出する名簿によって、登録用カード用紙を請求してください。名簿によって請求する場合は、個人からの請求は不要ですから、重複して請求しないよう特に注意してください。

- (2) 前記大学・研究機関等に所属しない方で個人でカード用紙を請求する方は、下記様式第1により「登録用カード用紙請求書」を直接、中央選挙管理会あて提出してください。

3. 有権者等の異動届について

有権者は氏名、住所（住居表示の変更を含む）、本籍、勤務機関および職名、勤務地等のいずれかに異動があったとき、または博士の学位を取得した場合には、そのつどすみやかに、別記様式第3により、「有権者異動届」を中央選挙管理会に提出してください。これを怠ると、有権者の権利を行使できないことがあります。

なお、登録用カード提出者は、有権者名簿に登録される以前においても異

動の届を励行してください。

また、本人が死亡した場合は、その旨を、遺族またはその関係者から届け出てください。

様式第1

登録用カード用紙請求書	
(ふりがな)	
氏 名	㊟
住 所 (郵便番号)	
勤務機関および職名 (又は自営の職業名)	

様式第2

所属部または専門変更届			
昭和 年 月 日			
日本学術会議中央選挙管理会 御中			
(現登録の所属) 第		部	学 地方区
(ふりがな)			
氏 名			㊟
わたくしは、現在の専門を変更いたしたいので登録用カード用紙を請求いたします。			

様式第3

有 権 者 異 動 届		
昭和 年 月 日		
日本学術会議中央選挙管理会 御中		
第 部 学 地方区		
(ふりがな)		
氏 名 ㊟		
下記のとおり異動がありましたからお届けします。		
事 項	(新)	(旧)
1. 氏 名		
2. 住 所 (郵便番号)		
3. 本 籍		
4. 勤務機関および職名		
5. 勤務地 (郵便番号)		
6. 博士の学位	① 学位の種類 ③ 授与年 昭和 年	② 授与大学 ④ 所属学会

(注) 1. 事項1～6のうち該当事項のみ記載すればよい。

2. 新たに博士の学位を取得した者は、学位の種類、授与大学、授与年とともに、かならず所属学会名を記入すること。

備考 様式第1, 第2, 第3とも用紙はなるべく半紙半截大 (B5) のもの、または葉書を用いてください。

言語研究第 56 号・第 57 号訂正

各著者からの申し出をもとに、下記のとおり訂正します。

第 56 号

頁	行	誤	正
p. 1	本文10行目	……しかなされていない,	……しかなされていない。
p. 9	2行目	「*ポー	「*ボール
p. 10	3行目	……的表現であい。	……的表現である。
・	6行目	るものはとれないと……	ものはとれないと……
・	・	……行っていない	……行っていない。
p. 11	6行目	キョウ太郎ハ僕ノ家へ	キョウ 僕ノ家へ
p. 16	下から2行目	……出ケーカヨウ」ト……	……出カケーヨウ」ト…
p. 16	6行目	T4 Addition of -ur	T4 Addition of -ru
p. 19	3行目	単なる一特徴すぎない……	単なる一特徴にすぎない
p. 25	英語本文7行目	Inirectification of……	Indirectification of……
・	下から7行目	direct quotations adjusted……	direct quotation is adjusted……
p. 66	13行目	“Mavakas a?	Mavakas a? apo?
p. 68	1行目	do tohod	apo? do tohod
p. 68	脚注1行目	anjel	anjel
p. 72			Table 4. (頁の最上段に 入れる)

第 57 号

p. 24	5行目	wyspø	wyspę
p. 32	5行目	1790	1690
p. 40	下から12行目	vergleich	vergleiche
p. 41	本文2行目	Straticational	Stratificational
p. 42	20行目	stata も	strata を
・	下から8行目	稿極面	積極面
p. 43	下から7行目	Vachak	Vachek

	下から5行目	等しく,	等しくし,
p. 49	2行目	Labial で Sonore	Labial な Sonorant
	4行目	そのような場	そのような場合
p. 50	下から5行目	under と stand	under- と -stand
p. 54	12行目	semenic	sememic
p. 55	下から10行目	the former	the farmer
p. 57	16行目	始き説明	如き説明

昭和 44 年度 会計報告

収入			支出	
前 期 繰 越	1,053	刊 行 経 費	676,332	
会 費 (現 金)	287,068	発 送 料	34,220	
(振 替)	572,250	大 会 関 係 費	40,800	
雑 誌 売 上	37,300	通 信 費	48,458	
補 助 金	100,000	事 務 用 品 費	1,105	
利 息	3,405	九 学 会 連 合 会 費	10,000	
寄 付 金	0	文 科 系 学 会 連 合 会 費	3,000	
		C I P L 会 費	36,130	
		雑 費	148,746	
計	1,001,076	計	998,791	
残高	2,285 円			

◇ 本誌は文部省昭和45年度科学研究費補助金の交付を得て刊行されたものです。